

見たこともない病気に苦しむ子どもたち

ウラン採掘と核廃棄物投棄で周辺の先

住民に深刻な被害

“ブッダ生誕の地”ともいわれるジャドゥゴダは、インドのビハール州南部シンガハム地方にあり、先住民が多く住む地域。インドで唯一のウラン鉱山があります。ウランを採掘・製錬する国営のウラン公社(UCIL)は、廃棄物を野ざらしのまま投棄、近隣の住民のあいだにはガン、白血病、流産・死産、奇形、先天異常、皮膚疾患など深刻な病気が広がっています。

ジャドゥゴダにウラン公社がやってきたのは1962年、いまから40年近く前のこと。以来、ウラン公社は、鉱山や製錬所から出る廃棄物や廃液を何ら処理せず、投棄ダムをつくって野ざらしのまま投棄し、たれ流しつづけてきました。いまでは他の核施設からの廃棄物の投棄場にもなっています。

周囲には、5キロ以内に15の村があって約3万人が住み、15キロ以内では42の村に7万5000人が住んでいます。そんなまっただなかに核廃棄物が野ざらしのまま投棄されている

のです。乾燥すれば砂嵐となって村々を襲い、雨が降れば水浴や洗濯など生活に使う川へと流れ込むという状態がいまも続いています。深刻なのは村人たちのあいだに、それ

まで見たこともない病気が広がっていることです。

ウラン鉱山で働いていた人はもとより、村人のあいだに皮膚疾患が広範に広がり、ガンや白血病が多発しています。女性たちのあいだでは流産・死産があたりまえになっています。1キロ以内の7つの村では、47%の女性が月経不順で、18%がここ5年以内に流産か死産を経験し、3分の2が不妊を訴えているとの調査もあります。さらに生まれながらに重い障害を持つ子どもたちが増えています。骨の奇形で手足の指が多かったり少なかったりする子どもたち、小頭症、水頭症、ダウン症などが広がっているのです。

住民たちはジャルカンディー反放射能同盟を結成して、ウラン公社を追及し、医療援助や補償を求めています。ウラン公社はいまなお「安全だ」とくり返すだけで、村人たちには最低限の医療すら提供されていません。それどころか、村人たちの畑をとりあげ、家をブルドーザーで押し壊して、新たな投棄ダムの建設を強行するなど、住民無視の姿勢を変えていません。



大飯原発を稼働させてはいけない3つの理由:「危ない」「逃げられない」「必要ない」



ストレステストの信頼性に疑いがある。原発の再稼働の条件の一つとされているストレステストは、電力会社が自分で実施し、原発産業からお金をもらっている委員を含む原子力安全保安院や原子力安全委員会が評価や確認をするもので、中立性がありません。結果を客観的に評価する審査基準もありません。福島原発事故を受けて、政府は今までの安全指針の見直しを行っていますが、新しい指針

はまだありません。原子力防災計画は国の原発事故防災指針に沿っていないといけませんが、国の指針はなく、自治体も計画を立てられずにいます。つまり、今は「安全に避難する計画がない」、ということなのです。原発を再稼働しなくても電気は足ります。



大飯原発が電力を供給する関西電力管内でも、省エネは効果を上げています。たとえば2012年1月24日現在の関西電力でんき予報では、大飯原発が稼働していなくても「安定した需給状況」となっていました。(グリーン・ピース)

